



山元春拳生誕150年記念企画展

P1～P3 蘆花浅水荘と山元春拳画塾

学芸員のノートから

P4～5 盆梅展「梅仙窟」にみる
膳所の近代

収蔵品紹介

P6 友情人形「ジェーン・ハイランド」と
答礼人形「近江滋賀子」



大津市歴史博物館

令和3年12月24日 発行

〒520-0037 大津市御陵町 2-2

TEL(077)521-2100

<https://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/>

山元春拳生誕150年記念企画展

ろ か せん すい そう やま もと しゅん きよ
蘆花浅水荘と山元春拳画塾

会期：令和4年3月12日(土)～4月17日(日)



1. 大正7年・山元塾早苗会集合写真 おいて 於膳所蘆花浅水荘



2. 犬娘の正月 うえなからちか 植中直斎



3. 乱舞 はやしふんとう 林文塘

山元春生誕 150 年に、早苗会を振り返る

明治5年(1872)、1月4日、膳所城下町と接する中ノ庄村に、山元春挙は生まれました(幼名を寛之助のち金右衛門)。大津の打出浜学校を卒業後、同16年頃に野村文挙に師事。さらに近代の円山派後継者であった森寛斎に文挙と共に入門します。画技・画境に磨きをかけた春挙は、同25年の日本青年絵画協会絵画共進会や日本美術協会展で受賞。同年には最初^{ぼいけい}の入門者、高井梅溪を迎えています。以後も両展で受賞を重ね、「近世の画家で春挙程早く名を成した人はいないのである」【村上文芽^{ぶんが}「絵画振興史」】と評されるほど画壇で頭角を現します。そして「廿四五歳に及んで既に門人十餘名有り」【『都市と芸術』山元春挙先生追悼号】と、若くして画塾といえる規模の門人を獲得し、同33年には「社中の数が二十人余りになつてゐたが、其連中^{その}の作品を陳列する事になつて御池^{おいけ}堺町の先生の御宅で第一回が開かれた」【『都市と芸術』追悼号】と、画塾展の開催に至っています(翌年には裏寺町の妙心寺で開催)。ちなみに同36年の第四回展からは「山元画塾 同攻会(同人攻究の略)」と名乗り、展覽会を花見小路の有楽館で開催。同42年は、より団体組織化した「早苗会」に移行し、大雲院で開催した塾展は「出品画総数二十余^{おおむね} 概 大作にして大幅屏風画の出品ありしは私塾として罕れ(まれ)に見る」充実ぶりで評価されました【『美術新報』8号4巻】。塾員の陣容も名簿上では古参から新参まで最大292名に達し、竹内栖鳳^{せいほう}の竹丈会^{ちくじょう}などとならぶ画壇の一大勢力へと成長。春挙様式を継承する者から、独自路線を追求する者まで、共に在籍して切磋琢磨する大らかな気風のもと、特色ある作品の数々を世に送り出しました。

ちなみに「早苗会」では、講演部や山岳部、幹事たちの番茶会が設けられ、親睦と啓発の福利厚生が図られており、縦社会ではなく、横社会としての画塾の在り方をみせています。これも、懐の広い春挙がもたらした塾内の良い気風でしょう。

以下、画塾の一端を、出品作品でご覧いただきましょう。

春挙様式を継承し、発展させた古参門人

春挙様式を継承したのは「同攻会」時代を知っている塾員が中心です。春挙が好んで作品の景物として描いたエッジを効かせた断崖や岩塊、アクセントとしての陰影。近代性を感じさせる鮮やかな緑青や群青の彩色。それらをより柔軟に応用して我流の春挙スタイルにアレンジしています。



4. 瀑布 山下竹斎



5. 月四題のうち夏 庄田鶴友

独自路線の塾員

独自路線の塾員は、その多くが20世紀以降の入門者です。彼らは、春挙風の山水・山岳画を描きません。むしろ対照的な風俗美人画や人物画、大和絵風作品を画塾展で発表しています。画法や筆技のノウハウに一部春挙様式的な共通点はあるものの、表現の意図が異なるので、作品を見ただけでは春挙門だとは分かりません。



6. 舞踊(部分) 渡辺幾春



7. 十五夜 塚本一洋



8. 早苗会山岳部白馬登山集合写真 大正7年(1918)

他の画塾とは一線を画して早苗会が熱心に取り組んだのが部活動です。なかでも、山水・山岳画家であった春挙自らが主導した部活動が山岳部です。まるで、高校・大学生の部活動と遜色ない濃厚な交流が行われていたことが、川畑春翠(1900年入門の中堅塾生。春挙直々に山岳部委員に指名される)の回想から伝わってきますので以下に引用します〔原文は旧漢字。()内は筆者注〕。

「大正四年に初めて山岳会を起こした頃のこと、その生れる動機が、師匠が蘆花浅水荘を建てられて、そのお祝に舟を贈らうと云う話が出たのでした。

ところが師匠の言葉に、舟をもらうのも結構だが、自分の遊び道具よりも、皆で有益なことをするのならとのお話で、丁度その頃は山岳熱^{さか}の熾んな時であり、伊吹山に山室を建てようとの計画で、師匠や下郷氏等と伊吹山へ登山することになりました。

登山の汽車中で私と色々山の話がされたりして、師匠は如何にも高山へ登ると、下界に見られぬ荘大な景観を味ふことが出来る。そうして一週間位も籠ればスケッチも思ふように出来て、画囊^{がのう}(作品のネタのストック)を充^{みた}すことが出来る。(中略)

荘大なるアルプスの大観を眼下に、朝夕変り行く自然の景色を充分画囊に収むることを得た。夜は天幕内にあつて師匠を中心に無礼講が始められる。皆それぞれ思ひのまゝの談笑や、かくし芸など連発で山上の一夜も短かく明ける。こんな団楽^{だんらん}的な旅行で師匠も塾員も全く一家族のやうな親しみがあつた。師匠とて遠慮はなく、弟子だと云つて憚^{はばか}らぬ真に和氣^{あいあい}霽々たるものがあつた。(中略) 今でもアルプスの絵などを描くとその当時のことなど連

想して、まことに感慨が深いのである。(中略) 今私の手元に秘蔵してゐる先生の遺墨のうちに左の狂句があります。附記す。」

花の色はうつりにけりな京小町

ふところ寒むく君はなり平 【『都市と芸術』追悼号】

ちなみに春挙は、登山先でも興が乗れば狂句・狂歌を揮毫^{きごう}していました。図9は、上高地の投宿先で門人^{より}と寄合^{あい}揮毫した即席の画賛です。狂句というより完全に関西のオッサン駄洒落です。春挙は16歳の頃、師の森寛斎の高尾観楓に同行した折に酒を忘れてしかられ、出先で購入した酒に狂歌短冊を添えて、失笑した寛斎は機嫌を取り戻したそうですが、部活動や画塾でも狂歌を繰り出しては場を和ませており、誠にお茶目な師匠だったようです。その点で晩葉のネコ画賛(図10)は正に早苗会を象徴するものといえましょう。(学芸員 横谷賢一郎)



9. 「たぐひのぼつちははきすて」
於上高地五千尺 春挙戯題
中原甕塘画 足田春湖旧蔵



10. 「惚れて通へば千里の濱も障子一重と思ふて来る」
柴田晩葉自画賛

盆梅展「梅仙窟」にみる膳所の近代

盆梅展といえば膳所

「盆梅は珍種百数十鉢を有し、毎年2月から3月にかけて京阪神からの吸引客で賑ふ」

これは、昭和4年(1929)に発行された『滋賀県名士録』の一文です。今の私たちが滋賀県内の盆梅展と聞けば、真っ先に思い浮かべるのは「長浜盆梅展」でしょう。とはいえ、冒頭の文は長浜のことではなく、当時、膳所(大津市中庄)で行なわれていた盆梅展「梅仙窟」について記されたものです。梅仙窟は、当時の篠津神社宮司、生駒晴彦が個人で開催していた盆梅展で、先代の秀逸の趣味であった盆梅を引き継いで百数十鉢にまで増やし、大正の初め頃から公開を始めました。会期は毎年2月から3月までで、膳所稲荷神社の初午祭に開花を調整していたといいます。



生駒晴彦と盆梅 『滋賀県名士録』 昭和4年発行

盆梅は、梅の盆栽のことですが、梅の木は一年中鉢に植えたままではなく、公開時以外は梅を鉢から地中に埋め戻して育てます。個人で行なっていたとはいえ、世話には常に3人程度の人が関わる本格的なものでした。

日本一の盆梅

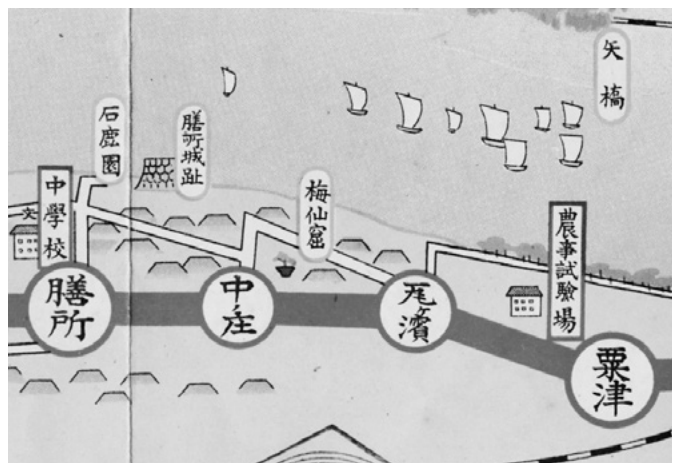
梅仙窟での盆梅展の様子がわかる資料として、『膳所町制施行三十年記念史』(昭和6年、同編纂事務所)には、こう書かれています。

「陳列さるる盆梅百数十鉢に達し先代から当主生駒晴彦氏に伝えられた奇木名樹は観者をして感嘆之を久しうせしめ、容易に去る能わざらしむ。培養の苦心は云わすもがな幽雅にしてかつ故実に通ずるの士にあらざるよりは到底企て及ばざる所で日本一盆梅の名ある蓋し吾人を欺かずといふべく例年公開されるので幾万人の雅俗参観し膳所町の大なる代表的呼物となっている。」

ここでは日本一と称されている梅仙窟は、京阪神から多くの観覧客が訪れる有名な催し物で、当時の滋賀や大津を紹介したパンフレットには、必ずといってよいほど掲載されています。行われていた時期は正確にはわかりませんが、資料等を総合すると、大正の初めから、昭和7年に生駒氏が亡くなるまで続けられていたようです。

大正期の膳所の姿

江戸時代に城下町として栄えた膳所は、明治の廃藩置県とともに、転換を余儀なくされます。明治2年(1869)、湖畔にたたずむ膳所城はなくなり、蒸気船の就航や鉄道



大津電車御案内(部分) 大正12年 個人蔵

の開通により、東海道を往来する物流は大きく落ち込みました。

明治34年の膳所町制施行後も、主たる産業のないままだった膳所の町が、再び賑わいをみせるようになるのは、大正2年(1913)の京津電車(現:京阪電鉄石山坂本線)開通以降のことです。大正6年の日本麻織物会社の誘致を皮切りに、同8年に旭人造絹糸などの工場誘致に成功、膳所は再び賑わいを見せます。

こうした頃に行なわれていたのが、盆梅展でした。鉄道網の整備をきっかけとして始まった旅行ブームのなかで、梅仙窟は日本一の盆梅として宣伝され、膳所の名を高めました。同時期には、山元春挙による蘆花浅水荘の完成(大正6年)や、岩崎健三による膳所焼の復興(同8年)がなされた時期にもあたり、観光や経済だけでなく、文化活動の面においても膳所の町が活発だったことが見て取れます。

盆梅の絵葉書

盆梅の話に戻しましょう。百数十鉢といわれる梅仙窟の盆梅の姿を知る手がかりに、絵葉書があります。

当時、発行された絵葉書を集めると、30種類以上の盆梅の姿がわかります。盆梅には、姿かたちに合わせてつけられた銘がありました。「不二」のように枝を富士山の形にあわせて育てたものや、「蓬莱山」のように幹の樹形に着想を得たもの。また「水くぐり」などは、枝全体で躍動感を表していて、写真だけでも楽しめます。また、「新怒猪」のように「新」という銘もあることから、百数十鉢の中には、同じような意匠の盆梅があったことがわかります。

また、盆梅の大きさは、資料等によれば、小さな作品が多かったとされますが、実際には鴨居に近いくらいのもものや、屋外に展示されているものなど、背の高さを越えるものもありました。実際、『滋賀県名士録』に掲載された盆梅の手入れをする生駒氏の写真には、人の背丈を越えるほど大きな盆梅が写されています。また、植えられた鉢も、姿かたちが多彩で、盆梅の見どころのひとつだったことが想像できます。

梅仙窟の終わりと盆梅の運命

昭和7年に生駒氏が亡くなり、行われなくなった盆梅は、その後、長浜盆梅展の盆梅に加わったという話が紹介されることがありますが、長浜盆梅展の資料には、そうした記録は残っていません。実際には、梅仙窟の盆梅は京阪電鉄・大谷駅のそばの料亭「ハ新」に引き継がれました。

平成27年(2015)、滋賀県の県政史料室(現:滋賀県公文書館)が、進駐軍関係の行政文書を歴史的文書として公開しました。戦後、ハ新は進駐軍によって、一時期接收されましたが、関係文書に盆梅のことが記されています。文書には、盆梅が生駒家からハ新に譲られるにあたって「盆梅の嫁入り」と称し、盛大な披露宴が催されたこと。また、戦後の進駐軍の接收を経て、建物が返還された時、丹精をこめて育てられ、長く引き継がれてきた盆梅は、すべて失われていたことが記されています。

こうして大正期の膳所を彩った盆梅展は、悲しい結末を迎え、今では絵葉書でしか偲ぶことができない、幻の盆梅展となりました。

(副館長 木津勝)



梅仙窟絵葉書(左から不二、蓬莱山、水くぐり、新怒猪) 大正から昭和 個人蔵

「青い目の人形」関連資料

友情人形「ジェーン・ハイランド」と答礼人形「近江滋賀子」

大河ドラマで注目された渋沢栄一は、その晩年に日米の国際交流に深く関わりました。それは、アメリカでの日本人移民排斥運動による両国民の関係悪化を改善するためにおこなわれた、友情人形を介した交流事業でした。日本では「青い目の人形」として知られています。今回は、本館で保管している「青い目の人形」関連資料を紹介します。



友情人形
「ジェーン・ハイランド」
大津市立平野小学校蔵

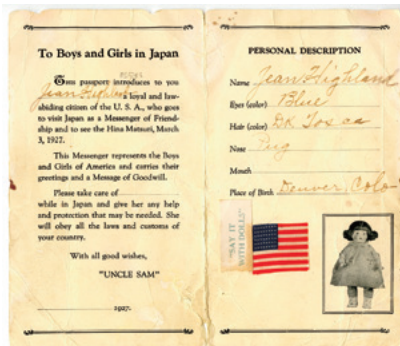
昭和2年(1927)、宣教師シドニー・ギュリックの発案で、日米の子どものための交流のため、約12,000体のアメリカ人形が、「友情人形」として日本へ贈られました。渋沢栄一は、日本側での受け入れに尽力しています。

ひとつひとつに名前がつけられた人形たちには、アメリカの子どもたちからの手紙も添えられていました。

昭和2年3月、ひな祭りの時期に合わせて到着した人形は、まず各都道府県へ渡り、全体の歓迎会が催された後に、各地の小学校や幼稚園へ配られました。滋賀県には約135体が配付され、現大津市域内の17校に配られたことが、当時の新聞記事でわかります。歓迎された人形たちですが、昭和16年12月の太平洋戦争開戦後には敵国の人形とみなされ、多くが破壊・廃棄されるという経緯をたどりました。

戦後、昭和48年のテレビ放送をきっかけに、全国で人形が再発見され、滋賀県では4体が現存します。そのうちの1体が、大津市立平野小学校のジェーンです。昭和48年3月25日『滋賀日日新聞』によると、昭和13年に裁縫室の床の間をベニヤ板で塞いで教室とし、昭和47年当時は職員室として使用していたものの手狭となり、改修のためベニヤ板をはがしたら出てきたということでした。戦時中、昭和18年頃に起こったとみられる人形廃棄の風潮の中で、誰かがその場所に隠して人形を保管したのでしょうか。

「ジェーン・ハイランド」という名前は、一緒に保管されていた人形のパスポートでわかりました。パスポートには、個別の番号が振られ、日本の子どもたちへのメッセージや、人形の名前、目と髪の色、出身地などが記載されていました。



人形のパスポート
大津市立平野小学校蔵

現在、人形とパスポートは、当館の常設展示で見ることができます(毎年1ヶ月程は平野小学校での学習のため、里帰りをしています)。

さて、昭和2年当時、日本からも答礼人形が用意され、同年のクリスマスに合わせて、58体の日本人形がアメリカへ贈られました。精巧なつくりの市松人形で、道具類もそろえた立派なものでした。答礼人形は、1体ずつ「ミス滋賀県」などの地名を冠して代表として贈られ、一度各地に回送して送別会が催された後、アメリカへ旅立っています。滋賀県代表は「近江滋賀子」とも呼ばれ、大津と彦根で送別会や数日間の陳列がおこなわれました。この時の記念に作られた写真絵はがきが残っています。



答礼人形「ミスシガケン」絵はがき 大津市歴史博物館蔵

答礼人形は、アメリカの博物館や図書館などに収蔵されたため残りがよく、8割ほどの現存が確認されています。しかし、フロリダ州マイアミ市の図書館に保管されていたという滋賀県代表人形は、残念ながら現存が確認できず、当時の写真でのみ、その姿を知ることができます。(学芸員 福庭万里子)